虚子記念文学館投句特選句・令和四年五月

稲畑廣太郎　選

日本の朝の始まる鯉のぼり　京都　西村やすし

ハイネに詩吾に俳句あり聖五月　兵庫　小杉伸一路

賜りしあまたのことば月涼し　神奈川　進藤剛至

葉の形空に表す新樹かな　兵庫　辻田あづき

薪能果てて大気の戻り来る　兵庫　武田優子

縄を分け潜る居酒屋夏暖簾　石川　伊東弥太郎

新緑に包まれて旅立ちの朝　岡山　山路　花

虚子館と呼び親しむや新樹晴　大阪　林　曜子（青少年）

あさがおやわらっておくれにこにこと　やまもとかいと（青少年）

能面をはみ出す頬や薪能　兵庫　武田奈々（青少年）

入選句・令和四年五月

つつじよりかげやはらかくしたたれり　岡山　石井宏幸
句会果て列車乗り継ぐ暮の春　大阪　多田羅紀子
師の姿仰ぎて若葉雨の降る　岐阜　花川和久
海亀の産みの苦しみてふ涙　大阪　西尾浩子
風船の戻らぬ空の青さかな　香川　葛原由起
若葉揺れ木洩れ日の綾緑なる　兵庫　槌橋眞美
真つ新な俳磚の壁聖五月　兵庫　奥田好子
比良比叡笑へば湖のさざめきぬ　兵庫　山田佳乃
花屑をぺたぺたつけてランドセル　兵庫　涌羅由美
春蘭や捨てあるごとく庭隅に　兵庫　岸川佐江
牡丹のごと美しき師を偲ぶ　石川　辰巳葉流
初夏の水の浮遊のあはあはと　兵庫　辻　桂湖
風五月神戸はパンの旨き街　兵庫　岩水ひとみ
社殿へと向かふ白無垢若楓　兵庫　高橋純子
大輪の蘂に溺るる虻の羽　鳥取　前田　千
牡丹の葉蔭に紛れなき真白　兵庫　池田雅かず
日に風に雨に耀く若楓　兵庫　玉手のり子
雲低く雨の五月の日曜日　兵庫　深尾真理子
ドローンの生物めきて五月空　奈良　好川忠延
虚子館はかつら若葉の中にあり　兵庫　藤井啓子
城内の順路を外れ春惜む　兵庫　永沢達明
鯉幟子は現世の風を受け　大阪　山田　天
面影を暮春の庭に館に置き　京都　山﨑貴子
潅仏や金のしづくになぞらるる　神奈川　金子三奈乃
師を偲ぶ若葉明かりに包まれて　大阪　須知香代子
主なき邸を埋めて庭若葉　大阪　山戸暁子
石南花や朝の大気の冷え残る　大阪　河辺さち子
夕焼けに染まるなんばを遠く見る　東京　田澤行望

太りたる子ども笑へり町の春　大阪　友岡飛鳥
春愁といひつ汀子師捜す目に　大阪　堀江信彦
あれもそれもこれも菖蒲の酒である　大阪　金成　愛
サンドレス柔く握って入る家　兵庫　内橋可奈子
神の声杜を認め若葉晴　京都　杉森大介
腕より光さざめく春朝や　三重　水越晴子
葉桜も花散るも佳き吉野山　奈良　堀ノ内和夫
おかつぱの椿子赤き袷著て　滋賀　近江菫花
桜蕊ふる哀しみの満ちるとき　兵庫　吉村玲子
白木蓮散るまで闇にもどれない　兵庫　岩鼻絹子
更衣図書館でなく虚子館へ　兵庫　岡本泰志
靴音の弾む銀座の薄暑かな　滋賀　石川多歌司
閉め切りし師の邸の庭木下闇　新潟　安原　葉
重なりて密を楽しむ若葉かな　兵庫　高市敦之
京焼の青磁の皿や初つばめ　兵庫　キートスぼんじょうし
庭みどり水音のみの静けさに　兵庫　清瀬　環
沙羅落花雨後の早瀬を流れゆく　兵庫　福間笙子
夏館師の情熱に学ぶこと　兵庫　英賀美千代
こんなにも淋しと思ふ若葉冷　兵庫　平田　惠
朧夜の森の湖底の漠の声　兵庫　松下ユキコ
甲子園心も晴れる五月かな　兵庫　小林秀幸
朧月夜空見上げてイナバウアー　兵庫　浜本佳世子
梅雨寒の仏の御居す大路ゆく　兵庫　足立朱麻
ビニールの音に寄り来る袋角　兵庫　塚本武州
着るものに迷ひゐる日日街薄暑　石川　辰巳昌彦
夫婦酒銀婚越えし聖五月　東京　櫻庭　寛
絵硝子の光あざやか聖五月　愛知　小野　薫
休みをり温泉宿の鯉のぼり　神奈川　平野孤舟
新設のこども図書館若葉風　兵庫　江川由美

燕の子日直日誌の黒き文字　兵庫　太平楽太郎

薫風や海峡渡る打球音　和歌山　中島紀生

同胞と妣を語りて新茶飲む　埼玉　土井洋子

若葉風降りはぺダル休ませて　兵庫　道中義臣

新茶土産全国大会優勝し　兵庫　ほりもとちか

特攻の基地より届く新茶かな　兵庫　大西美知子

葉桜の風青々と吹きぬける　兵庫　入谷千惠子

新茶淹れ人に会ひたき夕べかな　兵庫　山﨑渺美

封切ればかをり飛び出す新茶かな　兵庫　山岸正子

万緑に抱かれ虚子館静まれる　兵庫　田村惠津子

マリア彫るごとに樟の香聖五月　神奈川　小堀公美子

麦飯や百まで生きる覚悟して　兵庫　阿曽宏之

蚕豆の勢ひ余り笊の外　神奈川　金子三奈乃